

## 第4回ワーキングレベル会合が開催されました

インパクト志向金融宣言の第4回ワーキングレベル会合が、2022年11月1日(水) 09:30~12:00に、オンライン形式で開催されました。当日は、署名機関40社、国内の賛同機関の5団体に加え、本宣言への加盟を検討中の2社のオブザーバーを含む、計74人が参加しました。

第4回ワーキングレベル会合では、新規参加機関の紹介、分科会活動報告、プロGRESSレポート進捗報告、GIIN インベスターフォーラム出張報告のほか、「インパクト志向金融宣言のこれまで、これから」をテーマに参加者でディスカッションを行いました。

### 1. 新規参加機関の紹介

2022年9月1日付けで署名した株式会社 taliki、10月1日付けで署名した日本 PMI パートナース株式会社とJP インベストメント株式会社、並びに、11月1日付けで署名した山口キャピタル株式会社、慶應イノベーション・イニシアティブ、農林中央金庫、明治安田生命保険相互会社より、本イニシアティブへの期待やインパクトファイナンスに関連する自社の取り組みなどについて、コメントを頂きました。

### 2. 分科会からの報告

各分科会の座長・副座長より活動状況を報告して頂きました。(各分科会の概要は資料 P4~10 参照)

#### 【定義・算入基準分科会】

- ✓ 本分科会ではプロGRESSレポートに掲載するインパクトファイナンス残高の算出方法について議論を実施してきた。プロGRESSレポートに向けた基準は策定済みだが、今後、基準の見直し等が必要になった際には、本分科会で議論を行う予定。

#### 【IMM 分科会】

- ✓ 当面は SIMI 今田氏と SIIF 菅野氏が共同座長の役割を担うことになり、まずは IMM に関する参加者アンケートに基づき、IMM のお悩みポイントを共有する活動を開始。これまでに3回の会合を実施。加えて、VC 分科会との連携で、レクチャー形式で事例も交えながらアセットクラス横断的な IMM の基本形を学ぶ「IMM 基礎講座」シリーズを開催。
- ✓ 他の分科会との役割分担や位置づけについては今後協議していくことになるが、IMM分科会が横断的な役割を担い IMM の基本的な理解と普及を進め、アセットクラス特有の実践方法については、例えばVC分科会等で議論していくという進め方が想定される。

#### 【ソーシャル指標分科会】

- ✓ ESG の中でも S(ソーシャル)は、まだしっかりとコンセンサスのとれた枠組みが無い分野であるが、地域社会の課題解決を考えた時に、S の視点は、地域金融をはじめとした金融業界にとってはなくてはならないものであると考えている。本分科会では、単にソーシャル指標を考えていこうというだけではなく、地域社会の発展が金融にとってなくてはならないものであるという前提に立ち、金融の役割とは何なのかを考えながら、活動していく。

- ✓ 地域金融分科会とも連携を深めながら進めていく予定であり、これまでに「地域社会と金融の在り方」に関するディスカッションや、「S の観点でのグローバル潮流について」といったテーマで会合を実施。

#### 【AO/AM 分科会】

- ✓ 本分科会では、「どのようにアセットオーナーをインパクト投資に向けてエンゲージメントしていけるか」を課題として、アセットマネージャーの方々の意見を聞きながら、活動を進めていく予定。
- ✓ 重要な点として、最初からインパクト創出のインテンシオナリティの話をするのではなく、財務リターン実現のためにインパクトが重要となる事業やプロジェクトがあるという点を伝える事、インパクトとリターンの統合的な判断の仕組みを勉強し共有していく事、そして既存のポートフォリオにどのようにインパクト投資を組み込んでいけるのかといったテクニカルなサポートまで踏み込んでやっていく事が必要であると考えている。そういったことを、時間を掛けながら、海外事例も見ながら進めていく。

#### 【地域金融分科会】

- ✓ 前回のワーキングレベル会合以降、計3回(7月、8月、9月)の会合を実施し、事例の発表を中心に進めている。具体的には、ポジティブインパクトファイナンスの事例紹介や、京都信用金庫のソーシャル企業認証制度、また、ミュージックセキュリティによる地域企業へのインパクト投資や、三井住友信託銀行が実施した小田原市との官民の連携による地域課題解決の事例共有を行った。また、座長の金井氏が地方創生 SDGs 金融調査・研究会の委員であることから、最新の議論の内容や登録認証制度の変更点等についての情報共有も実施した。
- ✓ 本分科会をとおして、融資と投資の共通点や相違等を整理しながら、地域インパクトの底上げのための情報発信や、インパクトを起点とした地域金融機関とファンドとの接合のあり方等を議論していく。

#### 【VC 分科会】

- ✓ 本分科会は、VC が扱う資金の流れを可能な限りインパクト志向にしていくことと、インパクト志向の追求を実践しやすい環境を整備していくことを目的に活動している。
- ✓ IMM 分科会の報告でも挙げたように、IMM 分科会と連携して IMM の理解向上を図っており、今後は署名機関の具体事例や海外の先進事例を共有しながらピアラーニング形式で実践知の底上げを図っていく予定。最終的には VC 業界としての投資ステージや業界ごとのインパクト投資の共通理解や、グッドプラクティス例の整備といった活動を進めていきたいと考えている。

#### 【海外連携分科会】

- ✓ 本分科会では主に、海外で蓄積されているインパクト投資関連の情報の理解やネットワーク拡充、そして日本の活動を海外に発信していくことを目的としている。これまでに、前者に関しては BlueMark とのウェビナーや SDGs Impact のダイレクターとの座談会を実施しており、後者に関しては、後ほど紹介する GIIN インベスターフォーラムでの発信を実施してきた(詳細は以下 4.参照)

### 3. プロGRESSレポート作成報告

事務局より、PROGRESSレポート作成の進捗状況について情報を共有しました。現在、各社や分科会からの提供情報を元にコンテンツ作成を進めており、署名機関に対してタイムリーな情報提供への協力を依頼しました。

### 4. GIIN インベスターフォーラム出張報告

10月にオランダのハーグで開催された GIIN (Global Impact Investing Network) のインベスターフォーラムに、インパクト志向金融宣言海外分科会副座長の中村将人氏 (GLIN Impact Capital)、署名機関のひとつであるかんぽ生命の野村裕之氏、そして事務局の安間匡明氏、工藤七子氏 (いずれも SIF) が参加し、”Impact-Driven Financing Initiative and the Recent Evolution of Impact Investing in Japan” のセッションに登壇しました。参加者を代表して、安間氏より以下の報告がありました。

- ✓ 本フォーラムには世界中から 1600 名の参加者が集まり、前回(コロナ前の 2019 年開催)の 600 名から大幅に増え、関心の高さがうかがえた
- ✓ インパクト志向金融宣言の活動紹介セッションでは、参加者から日本のインパクト投資について様々な質問が挙がった
- ✓ 会議全体の印象としては、PE や VC、またアセットマネジメント会社の存在感が非常に大きく、Debt については途上国のマイクロファイナンス機関や一部の VC に限られ、主流はやはりエクイティ投資であるという印象であった
- ✓ 会議全体のキャッチフレーズが Thoughtful Innovation でありイノベーションの重要性が重視されていたこと、また、Courageous Leadership としてインパクト投資のバウンダリを広げていく主導的なリーダーシップや横連携・協力が求められていること、そして Confident Action として確固たる決意を持った行動が必要だということが強調されていた
- ✓ アジアに関しては、シンガポールのテマセックが、戦略的なスポンサーとして出てきて、GIIN インパクトラボの創設に加わるというサプライズがあった。アジアのインパクト投資のリーダーになるという気概が明確に伝わってきた
- ✓ 欧米の識者から発せられる ESG バッシングが話題となっており、ESG とインパクト投資が混同されているということに対する懸念の声も広がっていた

GLIN の中村氏とかんぽ生命の野村氏からもコメントを頂きました。今後も、海外連携分科会を中心に、海外連携の機会をとらえ、日本のグローバルにおけるプレゼンスの拡大にも貢献していく予定です。

## 5. ディスカッション「インパクト志向金融宣言のこれまで、これからについて」

ディスカッションに先立ち、事務局より、本ワーキングレベル会合前に実施した署名機関向けアンケートの結果を共有しました(資料 P14~P16 参照)。これまでの本宣言の活動については、特に分科会活動や、他機関とのつながり・業界ネットワークの構築、自社取組への反映といった面で満足度が高いことが分かりました。今後の活動への期待については、国内外での連携の強化、他の金融機関や事業者への拡大、質の向上や議論の深化といった点が挙がりました。

ブレイクアウトセッションでは、「①日本の金融業界として、インパクト投資に取り組むにあたって課題を感じていることは何か?」「②インパクト志向金融宣言で、中期的(3~5年後)に何が達成できていると良いか」について、8つのグループに分かれて議論しました。

「①インパクト投資に取り組むにあたっての課題」については、以下の意見が挙がりました。

- ✓ 手法としての IMM がまだ成熟していないこと。特に経済的なリターンとの関係を説明することが難しく、年金基金といったビッグプレイヤーをマーケットに引き込むにあたっては、受託者責任の観点からも、経済的リターンと社会的リターンが長期的には同期化するということを何らかの形で整理する必要がある
- ✓ 感度が低いこと。ESG の浸透も海外に比べて周回遅れであったが、インパクトについても遅れを詰めていくことが難しく、感度の低さにつながっている。インパクトは ESG 投資の本流になってきているという意識の変化も必要。
- ✓ 社会的リターンに関する因果関係の証明の難しさ。長年 IMM を実践している開発金融の世界においてもまだ難しいのが現状である。
- ✓ 社会課題の共有化。社会課題の共有化や評価の仕組みの共有化により、属人的な枠組みからよりプラットフォーム的な仕組みとしていく必要がある。
- ✓ 他社の動きの共有化や目線の共有。投資先のインパクトやエンゲージメントの在り方等について金融機関間で情報共有が必要。
- ✓ 誰のためのインパクトなのかという議論。何のためにインパクト投資を行うのかとなると、利益のためや社会貢献のためなど、様々な立場がありベースが異なるため会話が合わない。
- ✓ 専門部署と現場とのギャップ。専門部署では知見を深め、「社会的リターンが企業価値の向上に繋がって経済的リターンに繋がる」という認識のもとでやっているが、現場はより近視眼的である。
- ✓ インパクト指標の未整備。定義を決めて、インパクト指標として定めていくことが重要。
- ✓ 多様性を確保しながら市場を広げていくこと。事例やベストプラクティスの共有は重要である一方、それにより均質化しないよう、共通の要素を見出しつつも自らのビジネス領域や地域におけるビジネスに組み込んでインパクトファイナンスを進めていくことが重要。
- ✓ 事業者サイドの意識向上。IMM の実践に当たっては事業者側の意識向上も必要。また、投資先企業も巻き込んだ IMM の仕組みづくりも必要。
- ✓ リターンを生めるような案件不足。
- ✓ 人材の不足。実際にインパクト投資で測定やモニタリングとかしていくにあたり、専門性が求められるが、企業側にも投資側にももう少し人材育成が必要。
- ✓ 分かりやすい発信・可視化。インパクト投資で何をやっていることをロジカルに説明し、社内も含め開示、発信していくことが重要。用語の定義等も含め、可視化をもっと進めるべき。
- ✓ 市場の拡大。どのようにお金を集めて市場を広げていくかが課題。

「②インパクト志向金融宣言として中期的に達成したいこと」については、以下の意見が挙がりました。

- ✓ 日本独自のノウハウの発展。日本独自のインパクトも当然出てくるので、地域性を活かした IRIS+日本版のようなものが開発できると良い。
- ✓ 共有ナレッジの開発。インパクト投資拡大のために、インパクトの定義やスキーム、共通指標等を整理し、標準化・カタログ化できると良い。また、ベストプラクティスやモデルケースをこのプラットフォームでしっかり作り、広めていく。
- ✓ 海外発信。日本には様々な社会課題があるため、このプラットフォームで発見をされた様々なグッドプラクティスや実践のケースを海外に発信していけると良い。
- ✓ 金融機関が集まることによる社会課題の解決。金融の持つ可能性、つまり社会全体を見渡す力や俯瞰性があることを踏まえ、より良い社会に向けて動き出すエネルギーを発揮していくこと。金融が複数社集まることにより、社会課題の解決を一步一步達成していくこと。
- ✓ 認知度の向上。社内的にも社外的にも認知度が高まり、注目度が集まってくると良い。
- ✓ インパクトとリターンを出し信頼度を高めていくこと。インパクトと経済リターンが独立したものではないということを、中長期的に明らかにしていく。
- ✓ 多様な資金の出し手との横連携。例えば「この地域にどういったインパクト出すのか」といった議論を行ったり知見を共有したりすることにより、金融機関がスクラムを組み横連携できると良い。インパクトのエコシステムという観点で、エコシステム全体で足りていない部分を可視化するなどして、投資・融資が連携するなど、それぞれ相互補完的な役割を担っていけると良い。
- ✓ 継続させること。このプラットフォームを継続・発展させていき、日本のインパクトファイナンスの総本山になると良い。
- ✓ IMM の持っている可能性追求。IMM を投資だけではなく、合意形成の手段等に活用していく等、単に投融资を超えた、金融機関の新たな可能性の追求という観点。
- ✓ 新しい金融商品のスキームづくり。地域創生や特定の社会課題など、関心が高い課題・テーマに対して「このような取り組みが出来るのではないかと、こういうスキームならお金が出せるのではないかと」と、具体的なモデルケースをディスカッションして、新しい金融商品のスキームをつくっていく。
- ✓ エコシステムの構築。実践者を3倍位に増やし、エコシステムを発展させていく。先導を切っているプレイヤーのケーススタディを共有し、オープンに話せる場をつくっていく。3年後には成功事例だけでなく失敗事例も出てくると思われるため、そうした失敗事例も含めて共有できる場であってほしい。

## 6. 今後の予定・事務局連絡

- ✓ 次回のワーキングレベル会合は、代表者総会と併せて1月26日に開催予定
- ✓ プログレスレポートは1月に発表予定

資料: 第4回ワーキングレベル会合資料(別添)